

歴史にみるキリスト教と日本  
ーフランシスコ・ザビエル、日本に向かうー

学長 平 川 新

私の専門は日本史学です。そこでキリスト教が日本に伝来した戦国時代にまでさかのぼって、主に宣教師の記録を用いながらキリスト教と日本の関係を紹介していくことにします。

フランシスコ・ザビエルは歴史の教科書にも掲載されているほど有名な、カトリックの宣教師です。髭もじゃらの顔で描かれた彼の肖像画が残されています。戦国時代に来日した外国の商人や宣教師たちを描いた南蛮図屏風には、髭をはやしたヨーロッパ人が多く描かれています。髭をはやすと威厳があるように見える、ということかもしれません。宗派による違いもあるようですが、キリスト教を体現する宣教師も、そうした文化と一体だったということでしょう。

日本でも髭をはやした戦国武将は少なくありません。しかし平和で安定した江戸時代になると、無骨な印象の髭は敬遠されるようになっていきました。ところが明治時代の政治家には髭を蓄えた人物が多いので、髭が権威の象徴となっていたことがわかります。イスラム教の男性は、教義にもとづいて髭をはやすことが基本だとのこと。髭をはやしていない男性はイスラム教徒とは認めないという宗派もあるということですので、好みの問題をこえています。

このように髭の文化は、時代や民族により異なっていますので、比較文化論のテーマになるような問題でもあります。そう考え始めると、気になるのは当時のプロテスタントの宣教師はどうだったのだろうかということ。カトリックと同じように髭をはやしていたのでしょうか。宗教改革の立役者であるルターの肖像は髭がありませんが、もうひとりのカルヴィンには髭があります。そして、現在のカトリックの神父さんやプロテスタントの牧師さんたちは、どうでしょうか。ローマ教皇には髭がありません。そういえば、イエス・キリストは、絵画であれ、像であれ、どれも髭が描かれています。キリスト教と世俗の文化の関係を、こうした視点から読み解いていくと興味深い課題になりそうです。

ところで、フランシスコ・ザビエルはスペイン出身のイエズス会の宣教師でした。1549年に鹿児島に上陸して布教活動を始めました。今から465年前のことです。幸いなことに、ザビエルが任地から上司や友人に宛てた手紙が、『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』（平凡社、1985年）として刊行されています。そうした記録にもとづきながら、ザビエルの日本での布教活動をみておきましょう。十分には知られていない、興味深い事実も紹介していきたいと思います。

そもそもザビエルは、なぜ日本にやってくることになったのでしょうか。彼は1542年にインドのゴアに来ていました。ゴアは、15世紀末にバスコ・ダ・ガマが南アフリカ南端の

喜望峰を迂回してインドに到達したあと、ポルトガル勢力がイスラム王朝のビジャープル王国から奪い取った港湾都市です。ポルトガルがその後、アジアに植民地を広げていくさいに、軍事的・政治的・経済的に大きな役割をはたしました。アジアの富が、ゴアを通じてポルトガルに流れ込んだとまでいわれる重要都市でした。その植民地化とキリスト教の布教は表裏一体の関係にありましたから、ゴアはカトリックのアジア布教のための一大拠点でもありました。ザビエルは、そうしたゴアや周辺都市を行き来しながら布教活動をおこなっていたのです。

ザビエルが直接的に日本への関心を高めるようになったのは、1547年にマラッカに行つたさいに三人の日本人と出会ったからでした。このマラッカも、1511年にポルトガルがマラッカ王国を攻略して占領した港湾都市です。インド洋と太平洋を結ぶ海上交通の要地でした。植民地の拡大とキリスト教の布教の拡大が表裏一体であったことがよく分かります。ザビエルの年譜によりますと、マラッカの丘の聖母教会でアンジロウと出会ったとあります。翌年、ザビエルはアンジロウを伴ってゴアに戻っていますが、このときにはアンジロウのほかに二人の日本人も同行したようです。

1549年にザビエルがポルトガル国王ジョアン三世に宛てた書簡によれば、アンジロウら三人の日本人は、ゴアの聖信学院で勉強し洗礼を受けたとあります。彼らは日本で布教したいという強い希望をもっていたとのことですが、とくにアンジロウは八ヶ月でポルトガル語の読み書きができるようになったとのこと。それだけにザビエルも大いに頼りにしていました。

こうした日本人との出会いが、ザビエルを日本に向かわせたといつてよいでしょう。文化の伝播は、人と人との出会いから生まれてくることを示しています。日本人3人の素性はよくわかりません。ただアンジロウの場合、彼がザビエルと共に鹿児島に上陸してから、どのような人物とコンタクトをとったのかをみると、どうやら鹿児島のそれなりの地位の武士階級の出身のようです。

ザビエルの日本に行こうという気持ちをさらに強めた理由が、じつはもう一つありました。1549年にザビエルがヨーロッパのイエズス会員に宛てた手紙によると、マラッカには日本にいるポルトガル商人から、次のような情報が届いたとのこと。そこには、「日本の島の大領主がキリスト信者になることを望み、そのために使節をインド総督に送って、私たちの信仰を述べ伝える神父を派遣するよう頼んだ」とあります。

ポルトガル人と日本との関係で多くの人がすぐに思い浮かべるのは、鉄砲の伝来でしょう。1546年にポルトガル人の乗った船が難破して種子島に漂着し、鉄砲が伝えられると、すぐに本土に伝えられ、瞬く間に国内で大量生産されるようになったという、あの故事です。この漂着を契機にポルトガル商人は九州に渡来して、その地の大名や商人たちと貿易を始めました。いわゆる南蛮貿易の始まりです。それからわずか6年後には、前に述べたように、九州の有力な大名がポルトガル商人に対して、宣教師を派遣してくれと要望するほどになっています。いとも簡単に「キリスト教信者」になることを望んだようにみえますが、大名の側からすればキリスト教というのはたくさんある宗教のなかの一つという認識だったのかもしれませんが。それにキリスト教徒になることによって、ポルトガル商人と

の関係が強まれば、貿易にも有利になると考えたのでしょう。

ポルトガル商人の手紙には、「日本人は非常に賢く、思慮分別があって、道理に従い、知識欲が旺盛であるので、私たちの信仰を広めるためには大変よい状態である」とも書いてありました。ザビエルはインドでの宣教に限界を感じていましたので、日本を布教の新天地とすることに光明を見出そうとしたのです。

ところで、ポルトガル商人の手紙にある「大領主」というのが誰のことなのか、特定はできません。ただし、それまでにポルトガル商人が接触した可能性のある人物は限られていますので、薩摩の島津貴久か豊後の大友義鎮ではないかと推定されています。その手紙には、こんな逸話も記されていました。その商人に領主が与えた宿泊所は空き屋だったので、なぜ屋敷に人が住んでいないのかを尋ねたところ、その家には悪魔が住んでいるからだと言った。悪魔を追い出すために家の周りに十字架をたくさん立てさせたところ、その後、幻が出なくなったので、その地方の人々はあちこちに十字架を立てるようになった、という話です。十字架が悪魔払いに効果を見せたということですが、キリスト教がもつ呪術的な要素が日本人の関心をひいたということになります。

日本の領主が宣教師の派遣を求めているということもはっきりしましたし、何よりも日本へ案内してくれる日本人が3人もいたのですから、日本で布教したいというザビエルの気持ちは確実なものになっていったのです。もちろんそこには、日本での布教は神が自分に与えた使命であるという確信もありました。

とはいえ、ザビエルにも不安がないわけではありません。ザビエルがアンジロウに、「自分が日本に行けば、日本の人々は信者になるだろうか」と質問をしたそうです。するとアンジロウはこう答えました。自分の郷里（鹿児島）ではすぐに信者にはならないだろう。まず日本人は宣教師にいろいろな質問をし、彼にどの程度の知識があるのかを観察するだろう。特に宣教師の生活態度と彼が話していることが一致しているかどうかを見るだろう、と答えました。つまり言行が一致しているかどうかを日本人はしっかりと見ようとする、ということです。立派なことを言っているけれども、それをその本人がちゃんとやっているかどうか。本当に信頼できる人物かどうかを見極めようとし、信頼できる人物であるということがわかったら、キリスト教信者になるかどうかを判断するだろう、と言ったわけです。アンジロウは、こうはっきりと言ったそうです。「日本人は理性によってのみ導かれる人々である」と。ちゃんと納得しないと信者にはならないでしょうね、という意味です。だからこそ、ザビエルは日本で布教をしたいという思いを強めていったのでした。

1549年にマラッカからポルトガル国王に宛てた手紙のなかでザビエルは、次のように書いています。

「私は日本に滞在したことがある信頼できる多くの人から、日本の島々は信仰を広めるためにきわめてよく整えられたところであるという、たくさんの情報を入手しました。それで私は、この地方に行くのが神への大いなる奉仕になるのかどうか、至聖なる御旨を私自身に感じさせてくださいますように、またそれを成し遂げる力を私に与えてくださいますように、主なる神に大きな恩恵をお願いすることにしました。神はそれをお喜びになり、私が日本へ行くことは神への奉仕になると私の心のうちに感じる力をお与えになりました。このようにして私はインドを出発して、主なる神が日本に行って神に奉仕するよう、

幾度も私に感じさせてくださったことを実行することになりました」

このようにしてザビエルは、1549年6月、一人のポルトガル人の神父と三人の日本人ら共に、中国船に乗ってマラッカを出帆し、日本に向かいました。船の規模や構造からいって、当時はとても海難が多かったので、まさに命がけの航海でした。50日ほどのちに、ザビエル一行は鹿児島に着岸しました。もちろん、彼らの日本における布教活動もまた苦難の連続となったのです。